

# いわき丸トロール調査による震災後の底魚類の資源動向

## 背景

東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故で、海産魚介類が放射性物質に汚染され、福島県の沿岸漁業は操業自粛を余儀なくされています。

福島県沿岸の漁業資源は、操業自粛により増加していると考えられますが、水揚げによる資源評価ができません。

そこで、いわき丸トロール調査による水深100m以深の底魚類について、2016年と震災前3年平均との重量密度を比較しました。

## 材料と方法

【震災前】 2008から2010年までのいわき丸トロール調査

【震災後】 2016年のいわき丸トロール調査

【方法】 重量密度(kg/km<sup>2</sup>)について比較  
サイズ組成について個体数頻度(尾/km<sup>2</sup>)を2010年と2016年で比較

## 結果

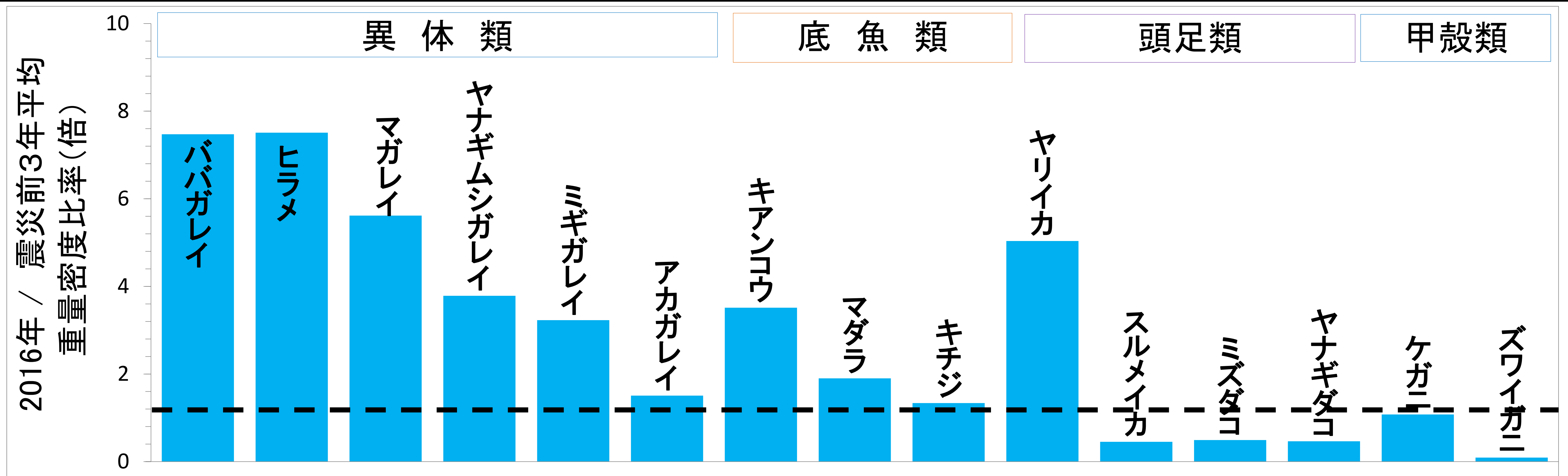


図1 2016年における震災前3年平均と比較した分布密度比率

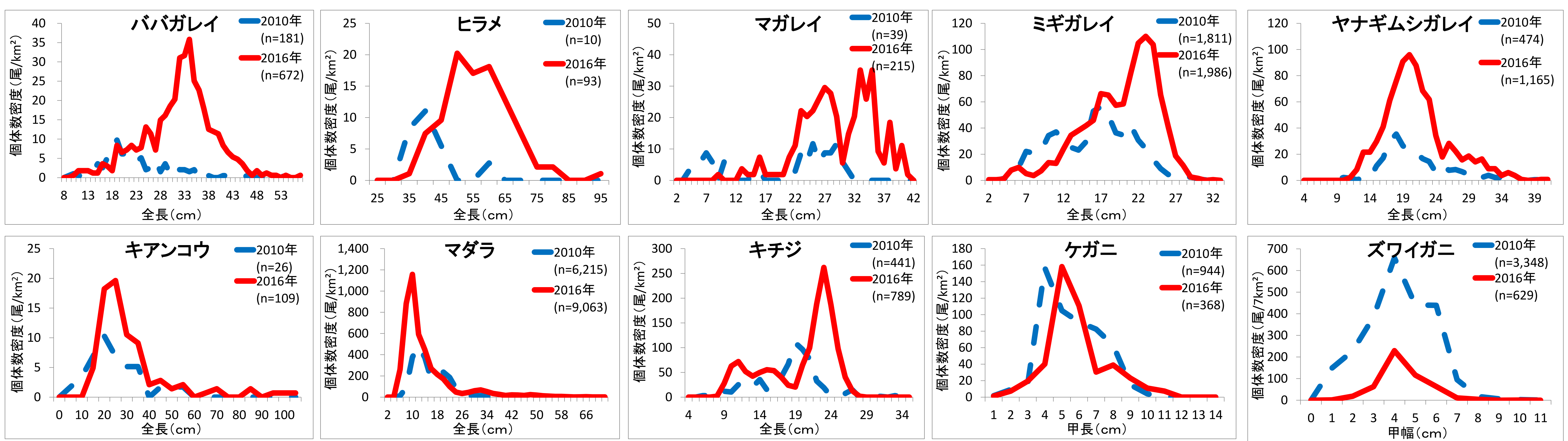


図2 2010年、2016年のサイズ組成(個体数密度)

- 異体類、底魚類は主要な種全てで重量密度が高くなっており、1.3～7.5倍に増加しました。
- 頭足類、甲殻類は増加した種、減少した種がみられました。
- サイズ組成は異体類、底魚類で大型個体の頻度が高くなる傾向でした。
- 新規の資源加入状況は、マダラが良好とみられました。
- ズワイガニは大型個体が減少し、小型個体が中心でした。

## まとめ

- 福島第一原子力発電所の事故による大規模な漁業制限が、重量密度の増加につながったものと考えられます。
- サイズ組成の大型化は、漁業制限により漁獲されなかった多くの個体が成長したのと考えられます。
- 親魚量が豊富であるにもかかわらず新規加入量の増加には必ずしもつながっていないことが確認されました。
- 本格的な操業が可能になった際に、豊富な資源を上手に利用する方法を検討していく必要があります。